

Book Review

歯科チェアサイドマニュアル 有病者はこう診る 全身疾患のある患者が来院したら

和田 健 監著
岡田 定 監修



Reviewer

加藤武彦 Takehiko Kato
(神奈川県・加藤歯科医院)

A5判、240頁
定価（本体5,000円＋税）
医歯薬出版刊



「全身疾患のある患者さんが来院したら」という観点からこの本は書かれています。

私は、早い時期から在宅往診に出かけている歯科医師として、有病の患者さんについての勉強を否が応にもせざるを得ませんでした。こうした患者さんたちは病気があって来院できないのだから、①どんな病気が、②ADL（日常生活活動）はどれくらいか、③介護は主に誰が担っているか、④主治医との連絡はどうするか、など、よく情報を得たうえで診療に入ることにしていました。ですから、私の診療室には「医学事典」を置いて患者さんがどのような病気で療養しているのかを学び、なおかつ「介護事典」などでこの患者がどのような介護を受けているかもつぶさに勉強してから患者さんのところへ往診に向かっていました。また、認知症の患者さんにも多く遭遇することから、日本で最初のグループホーム「シルバービレッジ函館あいの里」の林崎光弘さんのところに勉強に行ったり、介護技術の習得のために講習会に参加したりしていました。

歯科医師教育は健常者が診療室に来

るという前提から始まっており、全身疾患の教育も一応は教育の一環としてはあるのですが、このような在宅往診の現場で実際に有病の患者さんに遭遇すると、再度勉強をしなければ対応できませんでした。

そうしたなか、今回で紹介する『歯科チェアサイドマニュアル 有病者はこう診る 全身疾患のある患者が来院したら』が出版されました。本書は、「このような疾患にはこうした症状が出る」という解説、そして疾患に関する主な服薬の種類、さらには各疾患の患者に対して行ってはいけない治療、そしていざという時のために準備すべき薬剤まで、微に入り細に入り書かれており、非常に有用な本です。本書を読んでいると、あたかも有病者を診るための講習会に出た感があります。「専門医からのメッセージ」という、医科の各専門医からのアドバイスもあり、本当に親切な編集です。

本書の各論の第一章では、BP製剤や抗凝固薬などの各種薬剤を使用中の患者に対する歯科治療について紹介されています。この項目は非常に重要だと思います。たとえば骨粗鬆症に対す

る薬剤などは、骨密度が少ない患者に対して「転倒予防のために処方しておきましょう」と処方されるような場合があります。患者さんからよくよく医療面接で聞き出すことが重要です。

また、ワーファリンなど脳血管障害治療薬では、歯科治療のために薬剤の一時停止によるデメリットが近年多く報告されています。また、服薬を承知で抜歯せざるを得ない場合もあります。私の場合、このような場合には主治医との連絡を取ったうえで、抜歯後、縫合止血をして診療室で止血を確認し、患者の帰宅後には電話で再度確認するなどしていますが、こうした際における細かな対応方法が本書には書かれていて、読者にとって非常に参考になる本だと思います。

上にも書きましたが、超高齢社会で認知症の患者さんも増えています。認知症の理解とその患者へどのように対応したらよいか、その接し方について、もう少しページをさいていただけたら、ありがたく思います。